

# 愛媛における玉川の文化環境とその成立

玉 井 建 三\*

## 1. はじめに

玉川という川は全国に散見する。しかも、その多くが玉の系譜と昔時のひとの演出を容れて、ひととき美しく、あでやかに流伝する。

とりわけ、六玉川<sup>1)</sup>が古今を通じて名高いが、その自然と人文、ことに文化風土の面からはまだ論究されていない。そればかりか、玉を借りた全国の玉川名にいたっては、まったくと言っていい、調査報告がなされていない。

日本古来の風姿とあわせて、詩歌や謡曲に語られる玉川を、文学遺跡としてとらえる論法<sup>2)</sup>とか、特定の玉川流域を総合的<sup>3)</sup>にとらえた研究成果は、先学が学問の垣根を越える立場で、すでに報告している。しかし、玉川の川名にひそむ文化環境をくみあげる手法で、それも全国100カ所を越える玉川の流れに対して、その成立要因に関する研究の下地は、まだ熟していない。

我々は時代を離れて活きられないように、暮らしの舞台を構成する土地の風土からも、離れることはできない。だとすれば、玉川という川名には共通する文化風土というか、文化環境が、そこにひそんでいるとみたい。岸うつ波は変わらないが、ある時には流れに身をまかせ、またある時には自在に行く手を変える、そんな川瀬が玉川にある。それも貴人たちの伝言と、文化交渉で味付けされて。

こうした立場から、かつて筆者は全国の玉川を巡検調査し報告<sup>4)</sup>したことがある。そこで玉川という川名誕生の経緯について、7つの要因があることを指摘しておいた。つまり①古歌に詠まれた清流の川、②国府(中央政庁・城郭)周辺で貴人たちの遊里の場所に仕立てられた川、③玉作部たちが活躍する圏域を流れる川、④古社寺で靈魂の「たま」をひそませた霊水、⑤屯田で開拓民が故郷の玉川名を借用し付けた川、⑥水銀(丹生)のとれた川、⑦地名を川名に採用した川で

ある。

現代の川は素性が知れないけれども、旅びとの心をくすぐり、文盲の庶民の視線をも魅惑的にいざなう水面<sup>5)</sup>が玉川にはあった。玉川の川面に、そうした履歴が詰め込まれていることを、いまは過去形で語らなければならないが、ある普遍的な美の秩序をにじませていることに驚く。

もっとも、①から⑦までの玉川成立要因のうち、複数の要因が影響して玉川という川名を全国各地に残してきたのであるが、その下地には角礫が研磨され、丸い玉礫が河原を覆う河川の中流域、または伏流水の得られる野面で裏打ちされているように思える。とくに古歌で知られる六玉川を、川床縦断面に文化環境をつけて論考してみると、貴人たちのその作法がみえてくる。

もちろん、玉(田間)川には山・野(町)・浜・島に含意される『ま』と同じく、「間の文化」もひそんでいる点について、かつて指摘<sup>6)</sup>したことがある。隣接科学を借用してみても、『ま』にひめた古典のといかけは、奥が深かった。

こうした深意にふれながら、玉川の文化環境を地名学的にも探ってきたが、本稿では愛媛における玉川の地域風土の呼吸を汲み上げながら、その顔立ちを編んでみた。

愛媛の玉川とは3カ所存在している。そのうち越智郡玉川町と大洲市五郎の玉川は今もその流れが認められるが、松山市の一番町と二番町、そして勝山町にかけて町名とともに存在していた城下の玉川はすでに消滅している。古習のなかで育まれたこれら玉川を、文献史学でせまるにしても、資料があまりにも乏しい。そこで全国の調査結果から、愛媛における玉川の位置づけをおこないながら、論理を詰めてみた。

## II. ニウ(丹生)地名と玉川(越智郡玉川町)

伊予の国府は高縄半島東岸、今治市の郊外に存在した。松山よりも畿内よりの、予讃線伊予富田駅にほど

\*聖カタリナ女子大学

近い、瀬戸内の海路に恵まれた頓田川北側の上徳にのこる。そこは道前と道後に対して、まさに道中にあたり、伊予文化の吹き溜まりである。

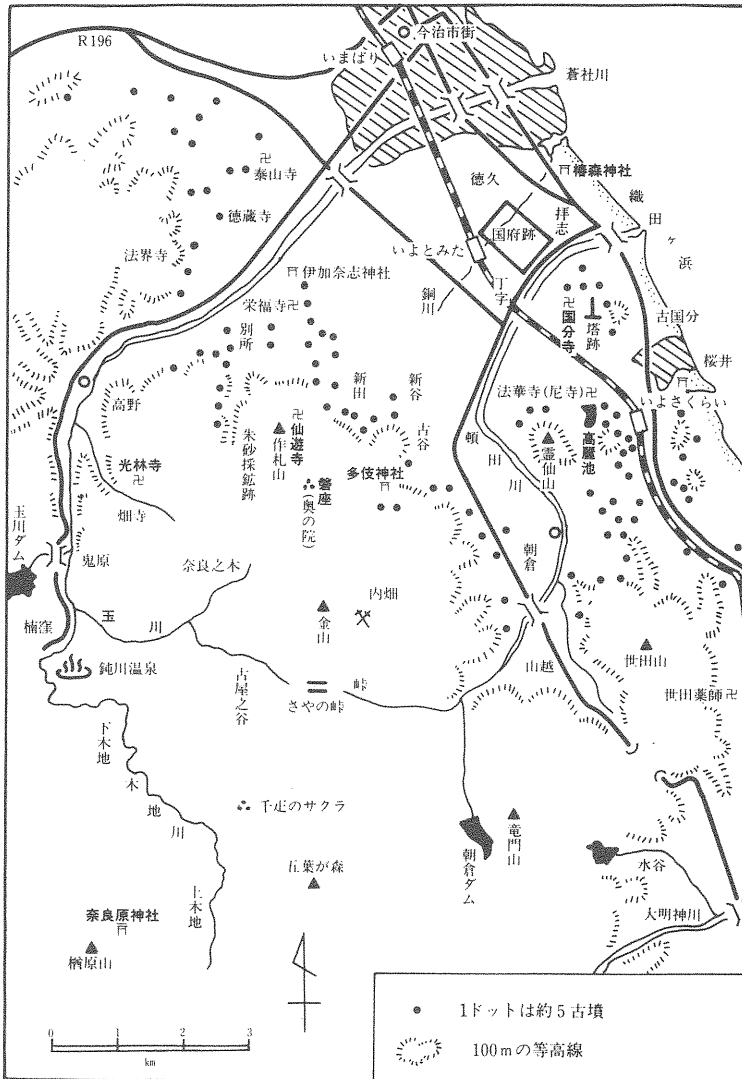
今治市の南郊、かつて水田地帯であった国府跡も、近年の土地利用の改変で宅地化が進行するなか、小御門や丁地など国府の所在を知らせる小名、更にはその周辺には大化改新以前から施行されていた条里が、長地型の土地割りで分布<sup>6)</sup>する。

ここ桜井の古里に、国府が置かれていたことを推定するには諸説があるものの、中央の史料『倭名類聚抄』や『延喜式』をもとに、今治藩医半井梧庵の著した『愛媛面影』<sup>7)</sup>と、東予の寺社が所蔵する古文書類などを綿密に考証した片山才一郎氏の説<sup>8)</sup>を採用したか

らである。国府の位置づけに関しては藤岡謙二郎氏<sup>9)</sup>も、ほぼ一致した見解を記している。

国府の置かれた桜井は政治的な中枢管理機能のみでなく、国分寺や国分尼寺など文化施設も、国府にそえるように唐子の岡にのこす。また上徳の東方、拝志の集落は頓田川の河口にあって、政庁への玄関口の役割をはたす砂丘上の古里だったという。銅川もここを河口にしている、山里から搬出される地下資源を精練したのか、丹生の守護神、朱盛神(朱砂神)を祭神にする椿森神社<sup>10)</sup>が老松にしずむ。更に丘陵には古墳群<sup>11)</sup>桜井駅西方には大陸の技術者が拓いたコマの鉄跡<sup>12)</sup>なのか、高麗の古池名もある。

こうした昔時の活躍舞台となった今治の野野は、蒼



第1図 伊予国府周辺の舞台構成

(玉井作成)

社川が大量に土砂を運んで舞台をつくり、そこを古人たちが加工演出させてきた野面である。奥が深くて広い舞台に、歴史も深い。だから伊予の国域でも、ここだけは探索の小径が多く、中古の文化環境の語りも聴ける。

さて蒼社川を遡ると、その支流に玉川があり地名も玉川町となる。玉川町は昔時には丹生川保であったことを、鈍川(にゅう川から、にぶ川へ転訛)<sup>12)</sup>の地名が知らせてくれる。『神鳳抄』には丹生川保を「玉河御厨」と記して、玉川保が伊勢神宮の御厨だと語りかける。奈良之木の小名、土居に「宮の上」があり、ここに伊勢天照大神の宮がおかれていたという。鈍川(丹生川)では檜原山(奈良原山)の谷奥から湧出する木地川の水の脈が、角礫を研磨する楠窪付近で玉川といい、この清水を神田に引水して栽培する稲穂を臨時祭料にあて、伊勢神宮へ寄進したと伝言している。

伊勢神宮の領地であった昔時、すでに玉川の呼称が認証できるが、それを乃間の大沢愛太郎氏の発案<sup>13)</sup>によって、昭和29年町名に採用している。また諸書によると、鈍川の流が大変美しいので、町名に採用したともいう。どちらにしても、それは後世の附会であって、玉川が記録にのこるのは建仁2年(1202)と古い。

そもそも高縄山は修験と結びつき、檜原山もその関係から役小角が朱鳥4年(689)に開祖したし、空海は大同年間(806~809)にこの山と光林寺で伝授していることから、真言密教との関連も深い。空海はこの時期、丹生の利用法を大陸から学びとり、すでに熟知していたと言われている。空海が高野山に大寺院を建立できたのも、用途の広いこの丹生(水銀)が聖域に存在したことにほかならない。<sup>14)</sup>だから空海が行脚の跡は、水銀鉱床とその採鉱とが結びつき、山ひだの細かい諸国山間盆地にまで、宗教布教という名目で波及浸透している。奈良時代、七堂伽藍の大寺院を建築するにも、空海の伝言に丹生氏の技と伝法の加勢があったからこそ、金属鉱物の精錬や染料、塗料も確保が可能であった<sup>15)</sup>

愛媛県今治市の第54番札所延命寺から、東予市をへて周桑郡小松町の第62番札所宝寿寺にかけた地域では地名や古社が丹生の存在を知らせてくれる。

今治市の椿森神社や玉川町の鈍川が、水銀との関係が深いことを先に記したが、現に第58番札所仙遊寺から光林寺にかけた山肌では、朱砂採鉱跡がよみとれる。また朝倉村古谷には多伎神社<sup>16)</sup>があって、丹生都姫命

に關係深い祭神<sup>17)</sup>であったり、東予市に地名で壬生川があり、隣接する丹原の町名とその町内の独立する神域丘の福岡八幡神社など、中央構造線に沿って形成する水銀鉱床の一部と関連する地相を、これらの史跡が語ってくれる。

そこで丹生と玉川の関係であるが、『玉川町誌』によると「南朝九代記」に「越智郡丹生柚川高野玉川里」の記録があり、次の歌が詠まれている。

世にあらば光りを月も宿すらん

丹生玉川の清き流れに 元中2年(1385)

また同じく町誌には、「聖明紹襲録」の記述「越智郡高野山玉川里」を載せている。

用途の広い水銀はもともと毒性が強く、飲用すれば有毒となることは知られている。にもかかわらず、「丹生玉川の清き流れ」と詠んでいる。水銀で汚染された河水が、なんで清き流れになろうか、玉川は自浄作用による清流でなければならない。こうしたことから、水銀と玉川という一見矛盾する内容がのこされる。しかし、それを解いてくれる河川が和歌山県の高野山奥の院を流れる玉川<sup>18)</sup>である。

この玉川は六玉川のひとつで「高野の玉川」と呼ばれ、古歌をのこしている。

わすれても汲やしつらむ旅人の

高野のおくの玉川のミつ 弘法大師

高野山を流れる玉川は毒ある流れだから、ひと皆汲んで用いてはならない、というのである。『大和本草』<sup>19)</sup>卷之三の砒石には、高野の玉川に「其水上ニ砒石アルカ」と、やはり毒水で記している。それについて筆者は、聖域の高野山そのものが丹生つまり水銀鉱床で、なかでも玉川流域が最も高品位の水銀が分布していることから、玉川を毒水でとらえたと報告<sup>20)</sup>した。もちろん、貴重な水銀のなかに「玉」にひそむ貴重の意味が容れられて、空海が行脚の跡にのこるのである。だから水銀と玉川の間には、その背景に宗教が絡んでいるのである。

愛媛の玉川町玉川の古歌、「丹生玉川」にしても、四国八十八ヶ所霊場と丹生に関する神社など、空海を通して高野山との関係が密であったことを語りかける。更に「越智郡高野、また高野山」がこや(古谷・高野・古屋)と読まれる場合もあるが、こや(こやさん)地名<sup>21)</sup>が存在していることから、その歴史は古い。ただ玉川地名が成立するのは、「高野の玉川」の成立を大師が登嶺する弘仁8年(817)以後であるとする

と、どんなに早く見積もってもそれ以降ということになる。

それだけに、玉川の由来は水銀と空海、それに「高野の玉川」の影響を受けた川名である。幾世代にもわたって踏み固めてつけた丹生玉川の道には、古人の祈りと丹生探索の跡がしみついている。

### Ⅲ. 城下町を流れる玉川（旧松山市玉川町）

玉川町という町名は城下町松山に、一番町と二番町、それに勝山町にまたがって昭和39年まで存在した。いま松山を代表する歓楽街の一角をなしていて、昔の面影と語りは町名を冠した駐車場と寺町の風情をのこすその境内だけになってしまった。

玉川町の町名由来について、池田洋三氏の著した『わすれかけの街』<sup>22)</sup>によると、「石手川がまだこのあたりを流れていたころ川の中心部に位置していたところから名付けた」と記している。また『角川 日本地名大辞典 38 愛媛県』<sup>23)</sup>によると、「松山平野の中央部に位置する。町名は石手川がまだこの土地を流れていたころ、その中心部にあたるところから命名された」と伝えると、ほぼ同じ経歴を記述している。どちらも、語り部というか、口碑としての伝言である。

ところで玉川町付近に石手川が流れていた調査結果とその論考になると、松澤巖氏の「藩政時代の石手川(-)」<sup>24)</sup>、村上節太郎氏の「重信川及石手川の舊河道」<sup>25)</sup>、素鷲郷土研究グループの「石手川開発に尽した人々」<sup>26)</sup>、窪田重治氏の『城下町松山と近郊の変貌』<sup>27)</sup>、それに『松山市史』<sup>28)</sup>などがあり、先学諸氏がその伝承を裏打ちするかのように論じておられる。それによると、松山城の築城以前、石手川は岩堰から道後公園の湯築城付近に流れ、持田から玉川町、そして二番町を流れ八ツ股堰（いま市役所前）から南流し、妙清寺（三番町7丁目）付近を過ぎて吉田浜に流れていたという。

城下町の建築が慶長7年（1602）に始まるといわれているから、当時この旧河道はまだ葦などで覆われた河原であった。一番町から三番町付近など、外側（とがわ）と呼ばれたその葦原を、町面に改変するのは加藤嘉明が会津に転封する寛永4年（1627）まで継続しておこなわれ、その頃になって、ようやく城下の顔立ちが整えられたことになる。こうした城下町の変貌に関しては、窪田重治氏の『城下町松山と近郊の変貌』がとくに詳しい。

松山のおいたちを探りながら玉川町をみつめていく

と、長い歴史の過程で、いくつかの問題点がこもっていることに気付く。まず旧石手川が玉川町付近を流れていたのは、流路変更がなされるまで、つまり慶長7年（1602）のころまでである。とすると、この旧石手川が玉川の流れだったのか。それとも町名が誕生する時期の、城下の水路なのか疑問がのこる。

全国の玉川を探索してみると、自浄作用による清流で、しかも城郭（国府）周辺で貴人（文化人）たちの遊里の場所に仕立てられた川であることが一般的であった。つまり、旧石手川の伏流水が玉水で湧き、川の自浄による清水であっても、築城以前においては玉川という流れは葦原のなかに存在しないのである。だとすれば、古文獻に記録されている地名を遡る以外にその解法がない。

そこで先の『角川 日本地名大辞典』<sup>29)</sup>によれば「元禄期の記事を載せた『松山町鑑』の後筆の注記によると、小唐人南片原町が改称して成立。改称時期は『松山手鑑』の宝永4年の条に玉川町が見えることから、宝永4年以前と思われる。」と記している。この記事からすると、城下の建設を始める慶長7年（1602）から宝永4年（1707）の、およそ1世紀の間に小唐人南片原町が玉川町に改名されたことになる。すなわち玉川町は城下町を整備する過程で誕生した町名で、「旧石手川のながれの中心部に位置していたから」といった口碑は、あくまでも語りすぎないから、当時玉川町は存在しなかった。ただ町名に採用される場合は、まず玉川<sup>30)</sup>の流れがあつて、流路に沿って町家が存在することである。

どこの城下でも、武家地の呼称は「何々様のお屋敷」と呼ぶだけで、もともと町名はなかった<sup>31)</sup>。現に元禄年間の松山城下町図をみても、外側などには町名が記載されていない。玉川町の場合は武家地のはずれで、明楽寺・専念寺・円蔵寺・正法寺などの寺町になっていて、専念寺の建立が寛永8年（1631）<sup>32)</sup>であることから、その頃はまだ町名が存在していなかったと考えられる。町家が誕生しても、小唐人南片原町が玉川町に改名されるのは、早く見積もって寛永8年以降、おそくとも宝永4年以前ということになる。

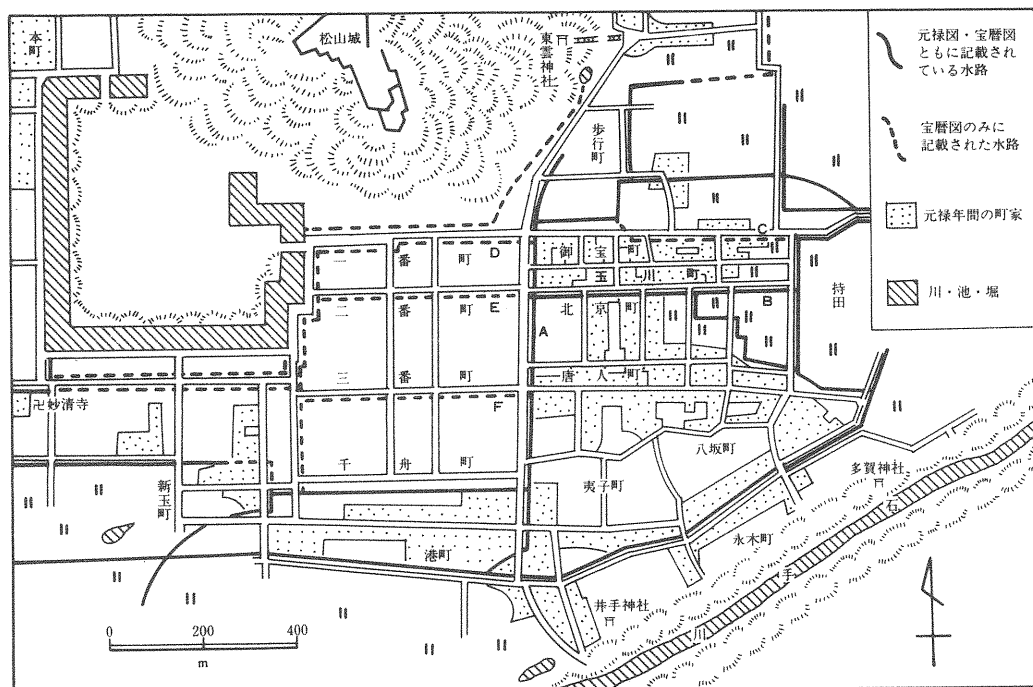
これらの内容から、玉川の流れを設定するには寛永から宝永にかけての時期の、玉川町周辺における水路の変遷をみることで、流域設定が可能となる。そこで町名として最初の記載年代「宝永4年以前」を踏まえ、それよりも古く、水路が最もよく描かれている元禄の

古図と、そして宝永より後の宝暦の古図を比較しながら、第2図で野面から町面への変化をみた。すると玉川町周辺にはAとB、それにCの流れが認められる。

なかで北京町に沿う、現在の二番町1～2丁目の北寄り地域のBの流れ、それに大街道3～1丁目に流れるAの水路は、宝永4年をはさんで、それよりも古い元禄の時期と、後の宝暦の時代にも描かれているが、一番町1丁目（御宝町）を西に流れるCは元禄図には描かれていない。つまりCの水路が元禄図

(1688～1703)に描かれていないから、玉川ではないことになる。同じく武家地を流れたD・E・Fも存在しなかった。更にD・E・Fの流れに沿う武家地には町名（玉川町）がなかった点からも、玉川でない。

いずれにしても町名が存在していることから、玉川の流域は武家地ではなく町家の多い土地柄でなくてはならない。そうなると、城下町を流れる玉川はBの流れで流域設定がなされていたことになる。



第2図 松山城下，玉川と水路

図中の町名は「松山市全図」（明治44年）をベースにした。一番町・二番町・三番町・千舟町などは、武家地のため、藩政の時代には町名がない。

元禄図・宝暦図をもとに玉井作成

#### IV. 忘れ去られた名勝「五郎玉川」(大洲市五郎)

大洲市にのこる古城は70<sup>33)</sup>近くあるといわれる。その多くは苔むした石垣や土塁，また堀がのこり，郭がなくても昔がたりをしのぶ小径がつづいている。

大洲といえば高い石垣のうえにそびえた櫓，蛇行する肱川の水面に映える大洲城跡を，だれもが想像するが，ほかにも城堡は市域のいたる所にあった。とくに古社寺や公園に名をかえて，土地柄の系譜を語りかける歴史のみちが多い。そんななか，蒼蒼の五郎玉川も

埋もれている。

丁度「名水百選」が選定されたように，かつて「日本三景」とか「近江八景」にちなんで，名所名勝を国域のなかで選定する時期があった。外なる自然を内なる庭園に映す作法とか美しい自然を保持する環境を，時代を超えて継承してきたのだ。そこには日本列島における照葉樹林の植物群落を下敷きにして，中央の貴人たちの庭園思想というか，演出法を加えながら造形してきた。川の生活文化誌が，肱川の川筋に広く深く詰め込まれている<sup>34)</sup>ように，忘れ去られた五郎玉川に

しても、そうした文化交渉の跡を野面にのこしている。  
 五郎玉川は伊予大洲駅の北方、肱川にかかる五郎橋を渡って県道榑生・大洲線を上る道路の左下を流れる細流である。どこの古里にもありそうな、何の変哲もない草莽のなかの小川であるが、かつては大洲盆地における景勝地として山川草木が交錯し、庶民の心もいやすほどの舞台構成がなされていたところである。

肱川のほとりの青木谷から、現代風に造成した玉川団地と大和工業の間を玉川の川筋に沿って脚を入れてみた。すると清水の流れに沿った水田の多くは、すでに栗園や杉の植林地に改変され、なかには畝が入られない荒地のままで改廃した湿地さえ散見する。蒼杉のなかには「五郎玉川焼」の窯跡ものこる。この焼き物は大洲藩十代藩主の加藤泰済の時期に焼かれた楽焼である。それについて『大洲市誌』<sup>35)</sup>には次のように記されている。

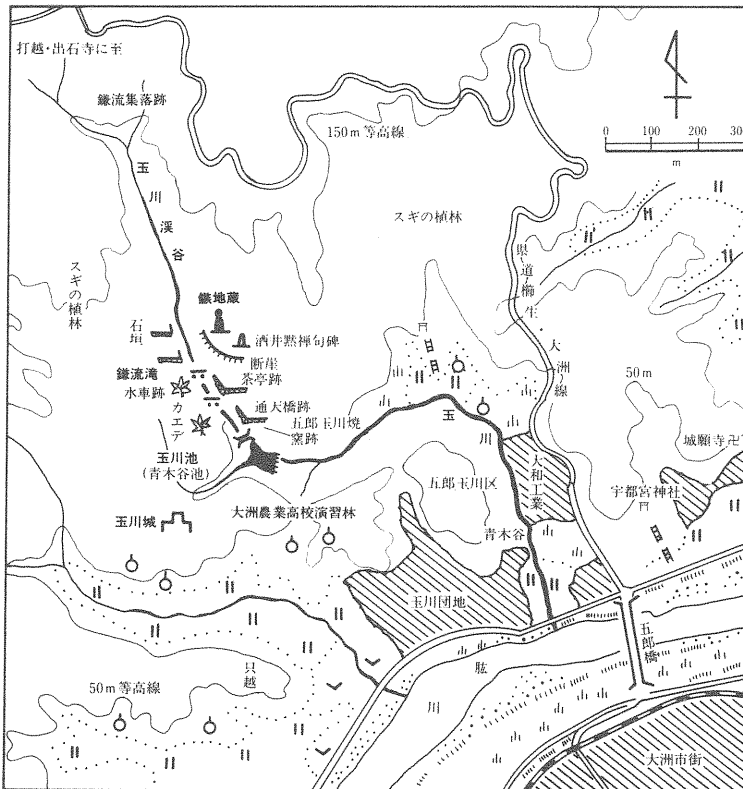
製作者を現存作品でみると、玉川別荘を再興した藩主泰済(文竜)、その叔父加藤泰周(乗化亭)、お茶方で御絵師の若宮養徳(文流)、家老大橋英信重固(墨雅・文養斎)、如法寺十五世靖山和尚その

他である。

伝世品の中で現在もっとも古い年銘をもつものに、養徳作の布目織部軸角皿がある。これを見ると皿の裏側にヘラ書きで、「文化丑(二年)十、文流作」とあるから、一八〇五年十月にできた……。五郎玉川焼の創始はおよそ文化年間のころになるが、その作風は数奇の文化がやどるような皿に和歌をあしらったものも残る。いかにも文人墨客がたずね集う、そして玉川の勝景を作品に込めるにふさわしい窯であった。

大洲農業高校演習林を過ぎると、かつての茶亭跡なのか石組みがのこるし、名園の名残りの玉川池がみえてくる。蒼苔のなか、すでに朽ちて自然にかえってしまったが、緑色片岩を積んだ石垣が清流にそってのこる。静寂の池のほとりに立つと、昔時の造園の枠組みと数奇者たちの作法が学習できるよう。(第3図)

この谷筋を玉川と名づけ、ここに名園を設定したのはいつの頃なのか、「玉川由来記碑」<sup>36)</sup>を要約すると、元禄から正徳(1688~1715)にかけて設けられたが、その後荒廃し文化4年(1807)ころ加藤泰済が再興し



第3図 大洲市五郎玉川流域の文化環境

(玉井作成)

ている。文政3年(1820)になると茶亭を阿蔵村の八幡に移したが、玉川の溪流は庶民へも公開したらしい。しかし、庶民を加えた遊里の場所も、廃藩ともなつて再び荒廃して現在にいたっている。

盛衰のはげしかった玉川は大洲藩主加藤泰恒が宝永(1704~1710)のころ玉川と名づけ、玉川の溪流に「鎌流滝」、磨崖仏の「鎌地蔵」、また流れに沿って桜や楓をあしらつて、数奇者たちの風流な地に仕立てられたことに始まるというが、数百年という時間を超えて、その名残りを今に留めている。

更に宝暦末年(1764)以降、大伴享によって編述されたという『大洲随筆』<sup>37)</sup>によると、次のように記載されている。

鎌流滝

喜多郡五郎村大戒谷といふ所也、宝永の頃、英久院君御別業を営せられ、滝の際ニ観音堂有、下ニ腰掛をしつらひ、式丁斗ニて谷口へ出、沿ニ杜若を数多植させられ、三河の八橋を移し給ふ、名を玉川と号て、此所ニも御茶亭有て、いと興有所なりしか、寛保の頃より絶て名のミニなりぬ。

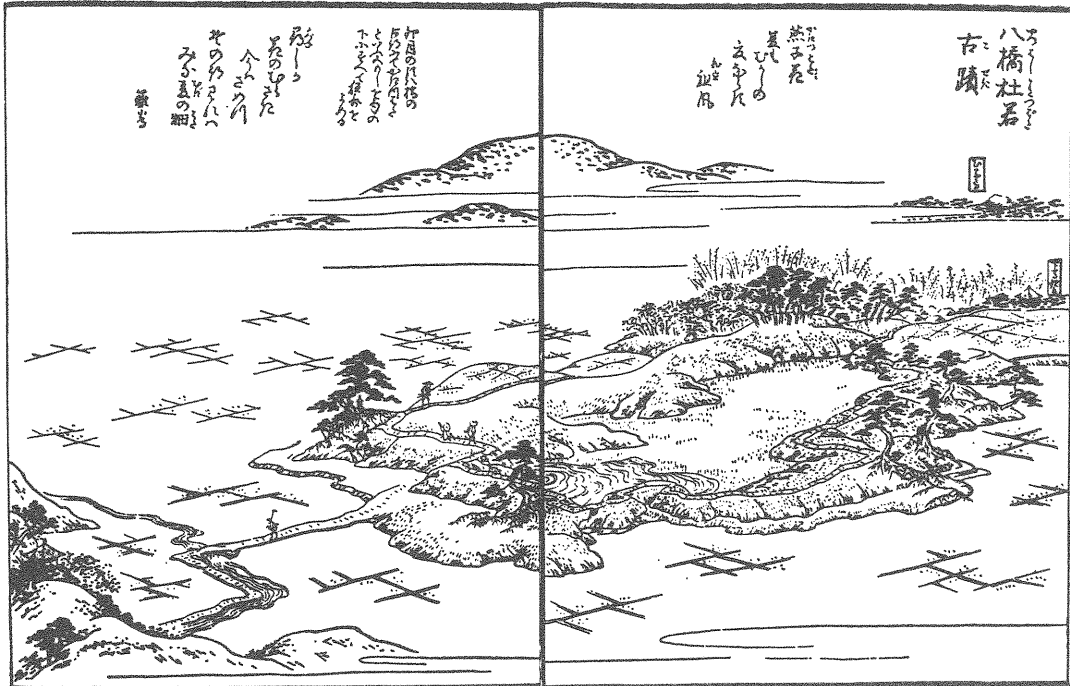
鎌流滝、観音堂(鎌地蔵)、それに杜若(カキツバタ)を植え、三河の八橋の景を模倣して、名を玉川とした

というのである。

ところが、横山昭市先生から借用した昭和52年度『溜池台帳』<sup>38)</sup>には、八橋や玉川の記載はなく、水田灌溉用に寛政2年(1790)設置された溜池「青木谷池」で記録されている。玉川池を青木谷池で伝言するのは、文政3年(1820)玉川溪流を庶民に公開する以前から、庶民が呼称していた溜池名であったことを物語っている。つまり溜池をはさんで、数奇者たちは上流側の溪流から観て「玉川池」、下流側で用水目的の庶民は土地の小字と農家名で「青木谷池」と呼称していたものと思われる。ただ『大洲随筆』の記載からみると、この溜池設置以前に古池が存在しなければカキツバタをあしらった八橋の景は模倣できなかつたと考えられる。

謡曲の三河国八橋を模したと伝承していることから、その借景と造園法には八橋の土地柄と一致させる手法が導入されているはずである。八橋は現在の愛知県知立市にあたり、逢妻川が八つに分流し、八つの橋が架けられていたことに由来して、「伊勢物語」の故事にちなんでカキツバタが橋のたもとに配されていた<sup>39)</sup>。ここ五郎玉川の池のほりにもカキツバタが植えられて、やはり水郷の景が観られたという。

しかし『東海道名所図会』に描かれた八橋(第4図)は沖積地で、田園のなかにあつて五郎玉川のような谷



第4図 三河八橋・杜若古蹟

「東海道名所図会」による。

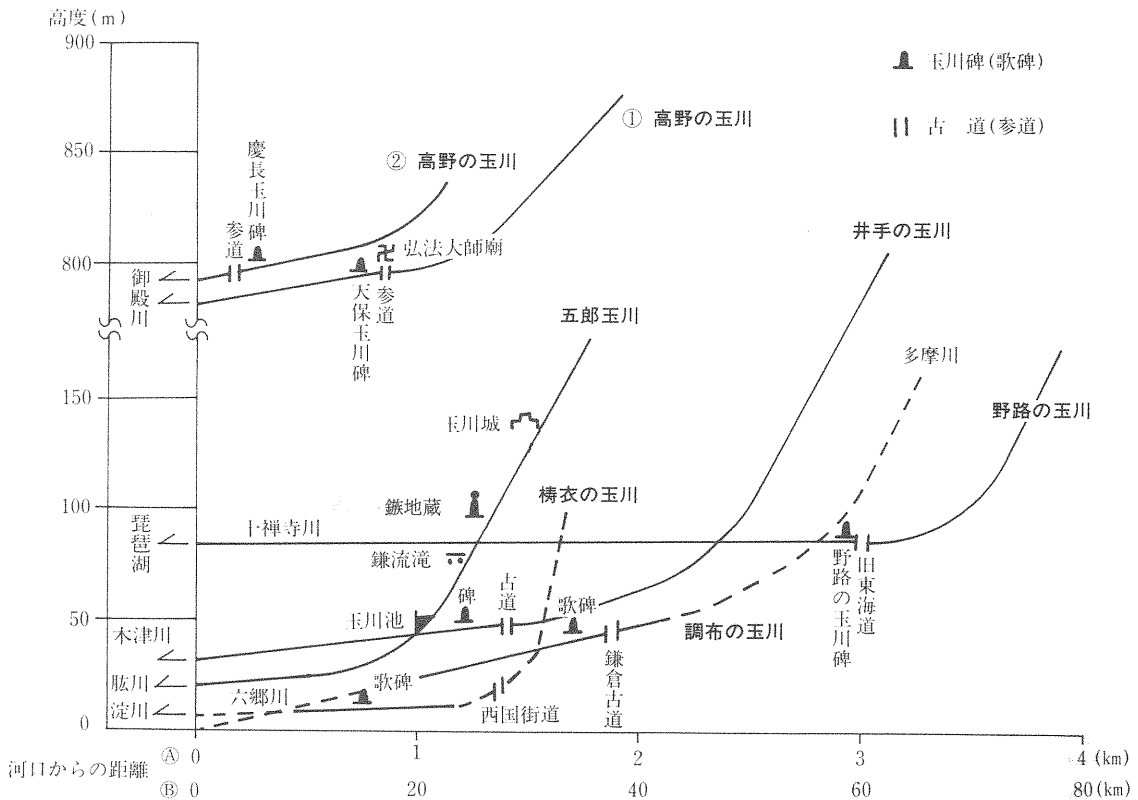
間の風土とは異質である。多くの文学作品に現れる八橋が、川の分流する土地柄に対して、玉川は谷口下の清流に位置していて、必ずしも八橋を模しただけの造園ではない謎がのこる。つまり「三河八橋の模倣」といっても、その造園の下地には玉川の故地がひそんでいるように思える。すなわち玉川は地形的変換点を過ぎ、谷口下の清流に当てられる場合が多く、文化的環境もこの流域に集積することが多い。とくに六玉川の河床縦断面と文化環境(第5図)<sup>40)</sup>をみると、そうした歌枕の故地(遊里の場所)と玉川の川名を誕生させた流域の設定とが一致してくる。

『大洲市誌』の「地名のおこり」<sup>41)</sup>によると、「他国の名勝地などに似た土地へ、その名を借用して玉川」と名付けたとあるが、この玉川とは全国に分布する多くの玉川が六玉川の影響を受けて命名されたごとく、六カ所の玉川の故地のうち、いずれかの水面を当てたのであろう。

全国の玉川をその地名由来でみても、第5図のような流域をもつ河川に玉川が生まれていることに気付く。五郎玉川の河床縦断面に文化人の環境を付けて、六玉川と比較してみても、やはり共通する河相であることに気が付く。すなわち玉川の命名が宝永のころであること、それに文人墨客の集う遊里であったことを考慮すると、六玉川の河相を取り込んだ流れであることも下敷きにしているように考えられる。

玉川池から玉川溪流にかけた場所は名園の表舞台。お茶屋跡や通天橋跡、桜や楓をあしらった鎌流しの溪流、そして岩肌をみせる鎌地蔵に断崖に刻む句作のあとと漢詩、どれをとっても先人たちの文化環境をにじませる。

とくに崖下の溪流から、つま先上がりで胸突きの小径を行くと、自然林に覆われた岩肌が観えてくる。訪れたひとの気配もないそこに、磨崖仏の鎌地蔵が、そまつな庵でまもられて鎮座する。それも右手の岩肌に



注 「栲衣の玉川」の上流は如是川の河床断面  
 注 「調布の玉川」と「栲衣の玉川」の河口からの距離は②、それ以外の玉川は①の数値で作成した。  
 注 「高野の玉川」で①は現在の玉川、②は旧玉川と呼ばれる場所の自然斜面で作成  
 第5図 玉川の河床縦断面と流域の文化環境 (玉井作成)



「祀らるる鑿地藏や岳の月」<sup>42)</sup> 左手の岩肌には「満天満地緑蒼蒼」<sup>43)</sup>と、近代の文化人たちの探訪のあとを岩に刻んでいて、風流の地を伝言している。かつての名園も、二次的自然林となった草木のなかにしずむ。

## V. 結 語

もともと玉川という川名は玉の語源に加えてその受容と変容、そして六玉川の文化環境から派生して誕生する。とくに古代においては、京畿を中心とする地域設定の枠組の文化圏域で認証できた。

こうした川名の由来を踏まえて、愛媛県内を流れる2河川と1地名の場所を検討し論理をつめてみた。すると、それぞれ玉川成立に関する背景には、およそ次のような事柄が指摘できた。

- ① 越智郡玉川町を流れる玉川は、丹生と空海、それに六玉川のひとつで「高野の玉川」の影響を受けた川名である。成立時期は弘仁8年(817)以降、建仁2年(1202)までの間である。
- ② 昭和39年まで松山市内に存在した玉川町は寛永8年(1631)から宝永4年(1707)の間に成立している。それも武家地には町名が存在しなかったから、城下町建設の過程のなかで町家の集中する土地柄に採用された。ただ、玉川という河川の所在は旧石手川を指すのではなく、玉川の町域に南隣した東西に流れる水路を指していたものと思われる。
- ③ 大洲市五郎を流れる玉川は、宝永年間(1704~1710)に大洲藩主加藤泰恒が名付け整備した川筋である。古文獻によれば、教養人たちが三河の八橋(現愛知県知立市)を模倣して命名したと記録するが、しかし川名と地名は玉川である。つまり八橋の造園法の下地には、六玉川の河相をも取り込んだ名所名勝地であったと考えられる。

以上愛媛の玉川について、その由来と環境を編んでみた。ただ古老の語りや古文獻を熟知して、また学問の枠を超える立場で探索しなければならないが、それについては今後の課題にしたい。なお本稿は第132回歴史地理学会例会で発表(日本の河川における「玉」の歴史地理)した一部と、その後の調査を加えて作成した。

公私にわたり御指導御鞭撻を賜って居ります横山昭市先生の愛媛大学退官を記念しまして、この拙文を献呈致します。

## 注と参考文献

- 1) 六玉川とは京畿を中心とする文化圏に存在する、古歌に詠まれた次の六カ所の玉川を指す。1.井手の玉川(京都府綴喜郡井手町井手) 2.野路の玉川(滋賀県草津市野路町) 3.栲衣の玉川(大阪府高槻市玉川) 4.調布の玉川(東京都調布市から狛江市にかけての多摩川) 5.高野の玉川(和歌山県伊都郡高野町高野山・奥ノ院) 6.野田の玉川(宮城県塩釜市玉川か?)ただし野田の玉川については、他に青森県と岩手県、それに福島県にそれぞれ候補地(伝説の地)があつて特定できない。それに関しては稿を改めて述べる。栲衣の玉川は三島の玉川ともいう。
- 2) 犬養孝著(1964)『万葉の旅』上中下 社会思想社(現代教養文庫)竹下数馬編(1968)『文学遺跡辞典 詩歌編』東京堂
- 3) 多摩川誌編集委員会(1986)『多摩川誌』河川環境管理財団
- 4) 拙著(1988)『武蔵玉川における生活環境に関する地誌学的研究』とうきゅう環境浄化財団
- 5) 拙稿(1991)「間の文化に関する歴史地理学的研究」聖カタリナ女子大学研究紀要3  
「日本の山地呼称に関する考察」1991年度日本地理学会春季大会発表(予稿集39)
- 6) 愛媛県教育委員会(1981~83)『伊予国府跡確認調査概報』I・II・III
- 7) 半井梧庵著(1966)『愛媛面影』愛媛出版協会
- 8) 藤岡謙二郎著(1969)『国府』吉川弘文館 236ページ
- 9) 前掲8) 236~237ページ
- 10) 今治市教育委員会(1980)『今治の歴史散歩』156ページ
- 11) a 今治郷土史編さん委員会(1988)今治市遺跡分布地図『今治郷土史考古』付図  
b 玉川町誌編纂委員会(1984)『玉川町誌』  
c 朝倉村誌編さん委員会(1986)『朝倉村誌』上巻
- 12) 前掲11) b  
玉井建三・山田 徹(1994)「愛媛の丹生地名」論叢2 聖カタリナ女子大学学術研究会(投稿中)
- 13) 玉川町教育委員会(1969)『玉川の民話』
- 14) 高野山金剛峯寺の大塔の西には丹生都姫命を祀る高野明神が位置している。この場所は高野山の中心にあたり、空海が水銀を重視していたことを物語る。
- 15) 松田寿男著(1975)『古代の朱』学生社  
佐藤任著(1991)『空海と錬金術』東京書籍  
蓮生観善編(1931)『弘法大師伝』高野山金剛峯寺  
近藤喜博著(1982)『四国遍路研究』三弥井書店
- 16) 多伎神社の奥の院と呼ばれる所が磐座(いわくら)である。(第1図参照)
- 17) 朝倉村誌編さん委員会(1986)『朝倉村誌』下巻
- 18) 高野の玉川は、現在御廟前の河川をあて、ほとりに標柱と天保玉川歌碑がある。しかし筆者が調査(1985年と1993年)してみると、一の橋を渡り奥の院参道に入ると

- すぐ参道がわかれて、再び合流する場所がある。その左手奥に羽後佐竹藩墓所があって、前に旧玉川碑（慶長玉川碑）がある。この佐竹藩墓所と隣の筑後久留米藩有馬家墓所の間、そしてその奥の山口毛利家墓所付近を「高野の玉川」は流れていたと思われる。その経緯について、本稿では割愛する。
- 19) 『大和本草』（1978）有明書房
- 20) 前掲 4)  
拙稿（1994）「六玉川の環境と立地要因(-)」聖カタリナ女子大学研究紀要 6
- 21) 前掲 11) b
- 22) 池田洋三著（1975）『わすれかけの街』愛媛新聞社
- 23) 『角川 日本地名大辞典 38 愛媛県』（1981）角川書店
- 24) 松澤巖（1915）「藩政時代の石手川(-)」伊予史談 4
- 25) 村上節太郎（1939）「重信川及石手川の舊河道」伊予史談 100
- 26) 素鷲郷土研究グループ（1984）『石手川開発に尽くした人々』
- 27) 窪田重治著（1992）『城下町松山と近郊の変貌』青葉書店
- 28) 『松山市史』第 1・2 巻（1992～93）松山市史編集委員会
- 29) 前掲 23)
- 30) 地名のみの玉川が存在して、河川名の玉川が存在しない例は、時代が降りてくる過程で消滅した場合は別にして、全国的には認められない。
- 31) 拙稿（1989）「野と田の地域文化誌」聖カタリナ女子大学研究紀要創刊号
- 32) 「温泉郡松山部地理図誌稿」『松山市史料集』第 9 巻（1982）の 64 ページに記。
- 33) 山田竹系著（1974）『四国の古城』四国毎日広告社
- 34) 横山昭市編著（1988）『肱川 人と暮らし』愛媛県文化振興財団
- 35) 『大洲市誌』（1972）大洲市誌編纂会 928 ページ
- 36) 『大洲市碑録』（1981）大洲市教育委員会
- 37) 「大洲随筆」『積塵邦語・大洲随筆』（1984）所収 伊予史談会（伊予史談会双書第 10 集）
- 38) 横山昭市先生から借用した愛媛県農林水産部発行の『溜池台帳』（昭和 52 年度）によると、「青木谷池」管理者・五郎、設置年・1790 年、目的・農業（田）、灌漑面積・田 2.1 ha、溜池・土堰堤、貯水量・4500 m<sup>3</sup>、堤高・2 m、堤長・30 m、満水面積・0.9 ha、貯水方法・斜樋と記録されている。なお、現堤高は約 5 m。
- 39) 『東海道名所図会』巻之三（1797）
- 40) 第 5 図の河床縦断面図中、①と②はともに「高野の玉川」であるが、現在玉川と呼称される河川を①で、慶長 16 年に建てられた旧玉川碑のある場所の自然傾斜面を旧玉川の河床と判断して②で記した。
- 41) 『大洲市誌』（1972）大洲市誌編纂会 815 ページ
- 42) 元日本赤十字社松山病院長（野村病院初代院長）だった福岡県生まれ、酒井黙禪作句。
- 43) 窪田哲二郎作